

『摂大乘論』第 VII 章「増上心品」

註釈文献の翻訳研究 (1)

嶋本 弘徳

1. はじめに

無著 (Asaṅga) が著した『摂大乘論』(**Mahāyānasamgraha* : MS) は梵本こそ失われているがインド瑜伽行派に属する論書であり、その名の示す通り「大乘を摂する論」である。論の体裁上は冒頭で『阿毘達磨大乘經』(**Abhidharmamahāyānasūtra* : AMS) の十種の殊勝語が示され、それらの殊勝語に基づき、序章を併せて全 11 章で構成されている。実際に MS は形式的には AMS の殊勝語に基づき論が展開されていくが、論中に AMS 以外に、『解深密經』(**Samdhinirmocanasūtra* : SNS) や『十地經』(**Daśabhūmika*)、『瑜伽師地論』(**Yogācārabhūmi* : YBh)、『大乘莊嚴經論』(**Mahāyānasūtrālaṃkāra* : MSA)、『中辺分別論』(**Madhyāntavibhāga* : MAV) が引用されている。つまり、MS は単純に AMS を解釈したのではなく、MS 以前の瑜伽行派の経論の思想に原始仏教以来の思想やアビダルマ的な教理をも総合統一組織化しようと創意工夫を凝らした無著自身の哲学論書である。また、論全体の構成として瑜伽行派の中核を担う阿頼耶識論 (I「所知依品」)、三性説 (II「所知相品」)、菩薩道論 (III「入所知相品」～X「果智品」) の三者に基づき唯識説を体系付けた論書として価値が高い。さらに、MS は境・行・果の考えに即して組織化がなされている¹。

MS の註釈書として世親釈『摂大乘論釈』(**Mahāyānasamgrahabhāṣya* : MSBh) と無性 (Asvabhāva) 釈『摂大乘論釈』(**Mahāyānasamgrahopanibandhana* : MSU) がそれぞれ伝わる。また、蔵訳本には著者・訳者不詳でなおかつ序章と第 1 章の約 4 分の 3 程度しか現存しない『秘義分別撰疏』(**Vivṛtaguhyārthapiṇḍavākhyā* : VGPV) がある。本論及び釈論は梵本こそ失われているが、蔵訳本と漢訳本を併せて 11 のテキストが現存している²。また、蔵訳の MSBh、MSU に関する先行研究として、これまでに公表されている主要な校訂テキストと翻訳研究は以下の通りである³。

¹ MS の構成に関しては拙稿 [2020] pp.140-144(19-23)註 1～7 を参照されたい。

² MS 及びその註釈のテキスト情報と先行研究史については、拙稿 [2020] p.140(23)註 8 を参照されたい。

³ 括弧内には節番号を示してあり、全節に亘って研究されているものには「(全)」を、未研究のものに関しては、「なし」或いは節番号と共に「未」と表示した。VGPV の校訂テキスト及び翻訳研究に関しては、千葉 [2001] [2002a] [2002b] [2004a] [2004b] [2005] [2006] [2007] [2008] [2009] [2010] [2012] に詳しく、冒頭から 1.2 の途中[D:296b1-309a5, P:356b7-371b1]までが連載されている。

『摂大乘論』第VII章「増上心品」の註釈文献の翻訳研究（1）（嶋本）

MSBh	校訂テキスト	翻訳研究
序 (1-5)	岩田 [1992] (全)	なし
I (1-62)	岩田 [1992] (1-10) 岩田 [2000] (11A-16) 岩田 [2001] (17-21) 岩田 [2003] (22-25) (26-62 : 未)	なし
II (1-34B)	岩田 [1981] (全)	なし
III (1-18)	下川邊 [1992] (全)	下川邊 [1994] (全)
IV (1-13)	なし	なし
V (1A-6)	なし	なし
VI (1-6)	嶋本 [2020] (全)	嶋本 [2020] (全)
VII (1-12)	なし	なし
VIII (1-21 [22-23 : 欠落])	なし	なし
IX (－ [1-3 : 欠落])	—	—
X ([1-27 : 欠落] 28-39B)	Ox [1989] (全)	Ox [1989] 英訳 (全)

MSU	校訂テキスト	翻訳研究
序 (1-5)	Hakamaya [1973] [1974] (全) 片野 [1978] (全) 註のみ	片野 [1978] (全)
I (1-62)	Hakamaya [1975] (1-13C) (14-62 : 未)	なし
II (1-34B)	片野 [1975] (全) 註のみ	片野 [1975] (全)
III (1-18)	(1-7 : 未) 原田 [1997] (8-9) (10-18 : 未)	合田 [1993] (1-5B) 合田 [2006] (6-7) 原田 [1997] (8-9) (10-18 : 未)
IV (1-13)	なし	なし
V (1A-6)	なし	なし
VI (1-6)	嶋本 [2020] (全)	嶋本 [2020] (全)
VII (1-12)	なし	なし

VIII (1-23)	なし	なし
IX (1-3)	片野 [1976] (全) 註のみ	片野 [1976] (全)
X (1-39B)	Ox [1989] (全) 上野 [2015] (9-27)	Ox [1989] 英訳 (全) 上野 [2015] (9-27)

以上のように、MS は初期の体系化された唯識思想を知る重要なテキストであるが、註釈文献の翻訳に関してはあまり進展がない。特に、瑜伽行派の修行道のうち、原始仏教以来の思想やアビダルマ的な教理を取り込んでいる第 IV～VIII 章の註釈文献の研究はほとんど進んでいないのが現状である。

そのうち、第 VI～VIII 章は戒・定・慧の三学の思想に基づいて章立てされている。また、第 IV 章「彼入因果品」で唯識性への悟入の因でもあり果でもあるとして説かれた六波羅蜜のうち持戒、禪定、智慧を再説する形で構成される。その背景として「戒が因となって、果として定を生じ、定が因となって、果として慧を生じる⁴。」といった伝統的な三学の解釈がある。つまり、声聞と共通である三学を立てつつも、根底には六波羅蜜が意識されており、声聞の三学よりも菩薩の三学が勝れていることを示している。そのため、それぞれの章題には「高度の」(*adhi-, lhag pa'i, 増上) という語が冠されている⁵。

本稿は、拙稿 [2020] に続き、MS.VII「増上心品」の第 1～8 節とその註釈 MSBh.VII 及び MSU.VII のテキスト及び試訳の提示と、拙稿 [2020] への訂正案の提示を目的とする。

⁴ MSBh.VI.3 〈六波羅蜜と三学の関係〉 [D: 172a5-6, P: 208b6-209a1] cf. 嶋本 [2020] p.129(34)

lhag pa'i tshul khriims kyi bslab pa la sogs pa gsum ni pha rol tu phyin pa'i ngo bo nyid yin na / ci'i phyir de pha rol tu phyin pa las tha dad du mam par gzhag par bya zhe na / gang gi phyir tha dad du mam par gzhag par bya ba de bstan par bya ste / di ltar bslab pa mams phan tshun rgyu'i ngo bo⁴⁾ mam par gzhag par bya ste / tshul khriims la bten nas ni / bsam gtan bskyed par bya ba yin no // bsam gtan la bten nas ni shes rab bskyed par bya ba yin no //

a) bo : P, N, bor

高度の戒学など三 [学] は波羅蜜を自性とするならば、どのようにそれが波羅蜜との違いを立てる (*vyavasthāna) のかと言う場合、違いを立てるそのことを教示して、このように諸学相互の因の諸自性を立てるのであり、戒に依拠することが静慮を生じさせるのであり、静慮に依拠することが智慧を生じさせるのである。

玄奘訳『攝大乘論釋』[世親] [T: 31.360c16-21]

釋曰。此中間答、辯諸菩薩所學尸羅。於聲聞等有大差別故、名殊勝。又此増上戒等三學、即前所說波羅蜜多自性所攝。何故別立。於先所說波羅蜜多、別義建立、今當顯示。爲顯展轉相因性故、別立三學。謂依尸羅發生靜慮、復依靜慮發生般若。

⁵ adhi には「上に」や「超えて」といった高次であることを意味する一方で、「について」や「に関して」の意味もあり、MSU.VI.1 では「戒について学ぶことが、高度の戒の学であり」と註釈されているほか、真諦訳では三学すべてに「依」を冠している。また、『雜阿含經』や『阿毘達磨集異門足論』でも三学は増上戒学・増上意 (心) 学・増上慧学であるとして、既に増上が冠されている。このような問題があるが、本稿では玄奘訳および長尾 [1982] [1987] に従い、*adhi-, lhag pa'i を「高度の」として解釈する。 若原先生記事

2. 『摂大乘論』第 VII 章「増上心品」

2.1 梗概とシノプシス

MS.VII は全 12 節と MS の中でも短い章であるが、菩薩の戒学の殊勝を説く前章に続いて、菩薩の定学が声聞のものより勝れていることを示す⁶。冒頭では、菩薩の禪定の殊勝を所縁差別、種種差別、対治差別、堪能差別、引發差別、作業差別の六者によって概説している。第 1 の所縁差別では、菩薩の禪定は大乘の法を所縁とすることが挙げられる。第 2 の種種差別では、菩薩のみにある首楞嚴三昧などの禪定が種々であることを説く。第 3 の対治差別では、菩薩は禪定で一切法総相縁智によりアーラヤ識中のあらゆる障が対治されることを示す。第 4 の堪能差別では、菩薩は禪定の最中であっても衆生利益のために下生するという堪能さが説かれる。第 5 の引發差別では、菩薩は禪定により六神通を引發することが示され、第 6 の作業差別では、19 種の威神力の作用が挙げられる。さらに六種差別に続いて菩薩の禪定はあらゆる難行を包摂する十種難行を達成することが説かれ、十種難行が順に示される。続いて、十種難行のうち第 8 の随覚難行について仏の密意趣への理解の補足説明が 3 つなされる。第 1 は、仏の密意趣への理解として布施行を例に 10 の問答が示され、持戒以下の六波羅蜜にも同様に適用されると説かれる⁷。第 2 は、菩薩が十悪をなすという密意趣への解釈であり、一一に示されるが、これらは語源的解釈となっている⁸。第 3 は、仏が備える 10 種の甚深なる徳目への理解であり、それらの密意趣を明かそうとする⁹。最後の総括として、菩薩の禪定の勝れた作用を六波羅蜜の修習、衆生の成熟、仏国土の清浄、仏徳の完成¹⁰の 4 種によって示している。

VII.1 菩薩の心学の六種差別：

①所縁差別、②種種差別、③対治差別、④堪能差別、⑤引發差別、⑥作業差別

VII.2 ①所縁差別 (*ālabhāna-prabheda, dmigs pas rab tu dbye ba)：

大乘法を所縁となす

VII.3 ②種種差別 (*nānātva-prabheda, sna tshogs nyid kyes rab tu dbye ba)：

大乘光明、集福、定王賢守、健行など種々の禪定

VII.4 ③対治差別 (*pratipakṣa-prabheda, gnyen pos rab tu dbye ba)：

⁶ MS では心学となっているが MSU.VII.1 にて「心の語は、ここでは心所 (*cāitasika) である三昧 (*samādhi) として説くのであり」と示されるように三学の第二定学を指す。また、諸三蔵において、定学は心学や意学としても記されている。

⁷ cf. 長尾 [1987] pp.221-227.

⁸ cf. 長尾 [1987] pp.228-233.

⁹ cf. 長尾 [1987] pp.233-238.

¹⁰ 漢訳では「仏法」となっているが密意趣への第 3 の理解と同じく、仏の十八不共法の法など仏の備える特質や徳目として理解する。cf. 長尾 [1987] pp.236-237.

一切法総相縁智による二障の対治

VII.5 ④堪能差別 (*kamaṇyatā-prabheda, las su rung ba nyid kyis rab tu dbye ba) :

堪能なる禅定

VII.6 ⑤引発差別 (*abhinihāra-prabheda, mngon par sgrub pas rab tu dbye ba) :

神通力の現成

VII.7 ⑥作業差別 (*karma-prabheda, las kyis rab tu dbye ba) :

十九種の威神力

- 1) 振動 (*kampana, g-yo bar byed pa)
- 2) 熾然 (*jvalana, 'bar bar byed pa)
- 3) 遍滿 (*spharāṇa, khyab par byed pa)
- 4) 顕示 (*vidarśana, ston pa)
- 5) 転変 (*anyathābhāva-karāṇa, gzhan gyi dngos por bsgyur ba)
- 6, 7) 往・来 (*gamana, 'gro ba, *āgamana, 'ong ba)
- 8, 9) 卷・舒 (*saṃkṣepa, sdud pa, *prathana, rgyas par byed pa)
- 10) 一切色像皆入身中 (*sarva-rūpa-kāya-praveśana, gzugs kyis lus thams cad 'jog pa)
- 11) 所往同類 (*sabhāgātā-upasaṃkrānti, skal ba mnyam pas 'gro ba)
- 12) 顕 (*āvirbhāva, snang bar byed pa)
- 13) 隠 (*tiro-bhāva, mi snang bar byed pa)
- 14) 所作自在 (*vasitva-karāṇa, dbang nyid du byed pa)
- 15) 伏他神通 (*para-rddhy-abhībhavana, gzhan gyi rdzu 'phrul rab tu 'jog pa)
- 16, 17, 18) 施弁念楽 (*pratibhā-dāna, spobs pa sbyin pa, *smṛti-dāna, dran pa sbyin pa, *sukha-dāna, bde ba sbyin pa)
- 19) 放大光明 (*rāśmi-pramokṣaṇa, 'od zer gtong ba)

VII.8 十種難行 (*daśavidha-duṣkara-caryā, dka' ba spyod pa mam pa bcu) :

- 1) 自誓難行 (*pratijñā-duṣkara-caryā, khas blang bar dka' ba spyod pa)
- 2) 不退難行 (*avyāvṛtti-duṣkara-caryā, mi klog par dka' ba spyod pa)
- 3) 不背難行 (*aparāṇmu-khībhāva-duṣkara-caryā, phyir mi phyogs par dka' ba spyod pa)
- 4) 現前難行 (*abhimukhī-bhāva-duṣkara-caryā, mngon du phyogs par dka' ba spyod pa)
- 5) 不染難行 (*nirlepa-duṣkara-caryā, mi gos par dka' ba spyod pa)
- 6) 勝解難行 (*adhimukti-duṣkara-caryā, mos par dka' ba spyod pa)
- 7) 通達難行 (*pravedha-duṣkara-caryā, rtogs par dka' ba spyod pa)
- 8) 隨覺難行 (*anupraveśa-duṣkara-caryā, khong du chud par dka' ba spyod pa)
- 9) 不離不染難行 (*adhinna-niḥsaṃkleśa-duṣkara-caryā, mi 'byed pa kun nas nyon mongs pa med par dka' ba spyod pa)
- 10) 加行難行 (*prayoga-duṣkara-caryā, sbyor bar dka' ba spyod pa)

VII.9 隨覺難行の密意趣への理解① :

六波羅蜜についての密意趣 (布施行への十問答)

VII.10 随覚難行の密意趣への理解②:

菩薩の十悪についての密意趣

VII.11 随覚難行の密意趣への理解③:

仏の備えた十種の徳についての密意趣

VII.12 禪定の四種作業:

- 1) 修到彼岸 (*pāramitā-bhāvanā, pha rol tu phyin pa bsgom pa)
- 2) 成熟有情 (*saṁva-paripācana, sems can yongs su smin bar bya ba)
- 3) 淨仏国土 (*buddha-kṣetra-pariśodhana, sangs rgyas kyi zhing yongs su dag par bya ba)
- 4) 諸仏法¹¹ (*buddha-dharma-abhinirhāra, sangs rgyas kyi chos thams cad bsgrub pa)

以下では、ボールドで示した MS.VII「増上心品」の第 1～8 節とその註釈 MSBh.VII 及び MSU.VII のテキスト及び訳語を提示する。

凡例

テキストの作成方針

- ・ MS.VII.1-8 [D: 32a6-33a3, P: 37b2-38b1]、MSBh.VII.1-8 [D: 173a3-174b7, P: 209b8-211a1]、MSU.VII.1-8 [D: 263a2-264a1, P: 318b8-320a7] において、D・P の二版を底本とし、中華 (中華大蔵經 76) を基に C・N の異読も挙げ、最良と思われる読みを採用した。
- ・ 対応する玄奘訳及び関連する BBh, MSA などのテキストについても註に示した。
- 漢訳無性釈の問題について

和訳の方針

- ・ 上記のチベット訳の校訂テキストを底本とした。
- ・ 訳文は、可能な限り原文に忠実であるように心がけた。
- ・ 読解し易くするために、〔 〕 内に筆者が補足した文言を入れて示した。
- ・ 同様に、指示代名詞の内容や、チベット訳と想定されるサンスクリットの前語を示す必要がある場合は、() 内にそれらの語を入れて示した。
- ・ 術語 (テクニカル・ターム) に関しては、現代語に翻訳すると、逆に理解しにくくなるものが多いので、敢えて伝統的な漢訳を踏襲したケースが多い。

¹¹ 漢訳では「諸仏法」となっているが VII.11 の密意趣への第 3 の理解と同じく、仏の十八不共法の法など仏の備える特質 (*buddha-dharma-abhinirhāra, sangs rgyas kyi chos thams cad bsgrub pa) として理解する。cf. 長尾 [1987] pp.236-237.

2.2 VII.1 菩薩の心学の六種差別

MS.VII.1 [D: 32a6-7, P: 37b2-4] cf. 長尾 [1987] pp.206-207

// bam po bzhi pa ste tha ma'o //

de ltar lhag pa'i tshul khrims kyi khyadpar bstan nas / lhag pa'i sems kyi khyad par ji ltar blta¹² zhe na / mdor
bsdu na rab tu dbye ba drug gis blta bar bya ste / dmigs pas rab tu dbye ba dang / sna tshogs nyid kyis rab tu
dbye ba dang / gnyen pos rab tu dbye ba dang / las¹³ su rung ba nyid kyis rab tu dbye ba dang / mngon par
sgrub pas rab tu dbye ba dang / las kyis¹⁴ rab tu dbye ba ste /

〈第四卷終〉

以上（前章）で、高度の戒〔学〕の殊勝を教示したのちに、高度の心〔学〕の殊勝をどのようにして見るべきか。

要略すれば、六種の差別（*prabheda 類別）として見るべきであり、つまり、①所縁差別と、②種種差別と、③対治差別と、④堪能差別と、⑤引發差別と、⑥作業差別とである¹⁵。

MSBh.VII.1 当該箇所なし¹⁶

MSU.VII.1 [D: 263a2-3, P: 318b8-319a1]

lhag pa'i sems kyi bsalab pa'i dbang du byas nas / mdor bsdu na rab tu dbye ba drug gis rab tu¹⁷ blta bar
bya ste zhes bya ba smos so //

sams kyi sgra ni 'dir sams las byung ba'i ting nge 'dzin du brjod de / sams kyis bris zhes bya ba'i sams pa la bya
ba bzhin no //

ting nge 'dzin de dmigs pa dang bcas pa'i phyir dmigs pa la sogs pas rab tu dbye'o //

高度の心学について、要略すれば、六種の差別（*prabheda 類別）として見るべきでありと言うのである。

¹² blta: P., N. lta

¹³ las: P., N. lus

¹⁴ kyis: P., N. kyi

¹⁵ 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c11-15]

如是已說增上戒殊勝。增上心殊勝、云何可見。

略由六種差別應知。一由所縁差別故、二由種種差別故、三由對治差別故、四由堪能差別故、五由引發差別故、六由作業差別故。

¹⁶ 玄奘訳『攝大乘論釋』[世親] [T: 31.361c18]

釋曰。爲顯增上心學殊勝、作此問答。

¹⁷ rab tu: om. P., N.

心の言葉は、ここでは心所 (*caitasika) である三昧 (*samādhī) と言うことであり¹⁸、心で描くという時の心的なもの (*cintā) について言われるのと同様である。

その三昧は所縁を伴うために所縁などによって差別されるのである¹⁹。

2.3 VII.2①所縁差別

MS.VII.2 [D: 32a7-32b1, P: 37b4] cf. 長尾 [1987] pp.207-208

theg pa chen po'i chos la dmigs pa'i phyir ro //

〔所縁差別とは、菩薩の三昧は〕 大乘の法 (*mahāyāna-dharma) を所縁 (*ālambana) 〔とする〕からである²⁰。

MSBh.VII.2 [D: 173a3, P: 209b8-210a1]

lhag pa'i sems las brtsams nas **theg pa chen po'i chos las dmigs pa zhes** bya ba ni gang gi phyir byang chub sems dpa' mams theg pa chen po'i chos la²¹ dmigs kyi / nyan thos mams ni ma yin no //

高度の心〔学〕について、大乘の法を所縁〔とする〕というのは、諸菩薩は大乘の法を所縁とするが、諸声聞は〔所縁と〕しないからである²²。

MSU.VII.2 [D: 263a3, P: 319a1-2]

theg pa chen po'i chos la dmigs pa'i phyir ro zhes bya ba ni nyan thos kyi chos la dmigs pa sel to //

〔菩薩の三昧は〕 大乘の法 (*mahāyāna-dharma) を所縁 (*ālambana) 〔とする〕からであるというの、声聞の法を所縁〔とすること〕を取り除く²³のである²⁴。

¹⁸ 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註 6. 「心 (citta) という言葉はここでは心所をふくむ三昧 (samādhī) として説かれる」

なお、三昧は、五位七十五法では心所法の大地法の第十に、五位百法では心所法の別境の第四に、それぞれ分類されている。

¹⁹ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕 [T: 31.427a29-b2] 直接対応する記述ではない。

釋曰。如増上戒與聲聞異、其増上心亦應有異、故爲此問。六種差別略答此問。如後別釋。

²⁰ 玄奘訳『攝大乘論本』 [T: 31.146c15]

所縁差別者、謂大乘法爲所縁故。

²¹ la : D., C. las

²² 玄奘訳『攝大乘論釋』〔世親〕 [T: 31.361c20-21]

釋曰。謂大乘法爲所縁者、諸菩薩定縁於大乘、非聲聞定。

²³ 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註 7. 「声聞の教法を所縁とすることを排除する」

²⁴ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕 [T: 31.427b3-5] 直接対応する記述ではない。

釋曰。大乘法者、菩薩藏中所有甚深廣大教等。聲聞等定非所能縁、是故殊勝。

2.4 VII.3 ②種種差別

MS.VII.3 [D: 2b1, P: 37b4-5] cf. 長尾 [1987] pp.208-210

the²⁵g pa chen po snang ba dang / bsod nams thams cad yang dag par bsags pa dang / ting nge 'dzin gyi rgyal po bzang skyong dang / dpa' bar 'gro ba la sogs pa'i ting nge 'dzin sna tshogs nyid tshad med pa'i phyir ro //

〔種種差別とは、菩薩は〕大乘光明（*māhāyāna-āloka）、集福（*sarva-punya-samuccaya）、定王賢守（*samādhirāja-bhadra-pāla 三昧王賢守）、健行（*śūraṅgama 首楞嚴）等の三昧が種々に無量だからである²⁵。

MSBh.VII.3 [D: 173a3-4, P: 210a1-2]

the²⁶g pa chen po snang ba dang / bsod nams thams cad yang dag par bsags pa dang / ting nge 'dzin gyi rgyal po zhes bya ba la / ting nge 'dzin smos pa ni 'di lta bu'i ting nge 'dzin sna tshogs las gang gi phyir nyan thos mams la ni gcig tsam yang med do //

大乘光明、集福、定王ということについて、三昧と言うのは、〔諸菩薩の〕このような種々の三昧のうち、諸声聞には一つさえも無いからである²⁶。

MSU.VII.3 [D: 263a3-6, P: 319a2-5]

sna tshogs kyi²⁷ rab tu dbye ba ni the²⁸g pa chen po snang ba zhes bya ba la sogs pa ste / gang la snyoms par zhugs na the²⁹g pa chen po'i chos mtha' dag snang ba de the³⁰g pa chen po snang ba'i ting nge 'dzin to //

gang du bsod nams thams cad yang dag par bsags te / bdag gir byas par gyur pa de ni bsod nams thams cad yang dag par bsags pa zhes bya'o //

ting nge 'dzin gyi rgyal po bzang skyong ni / 'jig rten gyi rgyal po bzhin du ting nge 'dzin thams cad kyi bdag po ste / gang yod na phyogs bcu mams su da lta³¹ byung ba'i dus kyi sangs rgyas bcom ldan 'das mams mngon sum du mthong bar 'gyur ro³² //

dpa' bar 'gro ba ni ting nge 'dzin mams kyi mchog ste / dmag mi mams kyi nang na dmag dpon dpa' bo bzhin du bdud kyi³³ tshogs 'joms par nus pa'o //

種種差別とは、大乘光明などということについて、〔三昧に〕入定すると一切の大乗法の光明が

²⁵ 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c16-17]

種種差別者、謂大乘光明、集福、定王賢守、健行等三摩地、種種無量故。

²⁶ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔世親〕[T: 31.361c24-26]

釋曰。大乘光明、集福、定王等者、顯如是等諸三摩地種種差別、唯大乘有、聲聞乘等一種亦無。

²⁷ ro : P., N. pa'o

²⁸ kyi : P., N. kyi

あり、それが大乘光明の三昧である²⁹。

そこ(三昧)であらゆる福德を集めて、自己のものにすることが集福といわれるのである³⁰。

定王賢守とは、世間の王のようにあらゆる三昧の主君であり、[それが]あるならば、十方における現在世の諸仏世尊が現前に見られるのである³¹。

健行とは、諸三昧の中で最高のものであり、諸戦士の中で将軍が勇者であるのと同様で、魔王の集団を破壊できるのである³²。³³

2.5 VII.4③対治差別

MS.VII.4 [D: 32b1-2, P: 37b5-6] cf. 長尾 [1987] pp.210-211

chos thams cad 'dres pa la dmigs pa'i ye shes kyis / khye'us khye'u³⁴ dbyung ba'i tshul du kun gzhi mam par shes pa la sgrib pa'i gnas ngan len yod pa thams cad 'byin pa'i phyir ro //

〔対治差別とは、菩薩は三昧で〕一切法総相縁智³⁵(*sarva-dharma-saṃbhinna-ālabhana-jñāna)により、楔で楔を出す方法で(*ānīpratyāñi-nirhāra-yogena)、アーラヤ識中にある障礙の亀重(*āvaraṇa-daṣṭhalya)がすべて除去されるからである³⁶。

MSBh.VII.4 [D: 173a4-5, P: 210a2-4]

gnyen pos rab tu dbye ba zhes bya ba ni gang gi phyir sgrib pa thams cad kyi gnyen por mam par gnas pa ste / ji ltar khye'u rags pa ni phra mos³⁷ 'byin par byed pa de bzhin du kun gzhi mam par shes pa la mam par gnas pa'i kun nas nyon mongs pa'i sa bon bag chags zhes bya ba rags pa ni gnyen po phra mos 'byin par byed do zhes bya ba'i tha tshig go //

²⁹ 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註8.「禪定(samāpatti)におけるあらゆる大乘の教法の光明、それが「大乘光明」の三昧である。」

³⁰ 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註8.「そこであらゆる福德を集めて、自己のものになすに至るそのことが、「集徳」と呼ばれる。」

³¹ 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註8.「定王賢守」とは、世間の王のようにあらゆる三昧の君主である。そこにあれば十方における現在世の諸仏・世尊を現前に見られるのである。」

³² 勝呂・下川邊 [2007] p.281, 註8.「健行」とは、諸三昧の中で最高であり、軍隊の人々の中で将軍が勇者なる如く、悪魔の集まりをも打ち破ることができるものである」

³³ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T: 31.427b7-9] 直接対応する記述ではない。

釋曰。菩薩所得諸三摩地差別無量。此中略說爲上首者、等餘一切聲聞乘等尚不開名。何況能得。

³⁴ khye'us khye'u: P, N. khy'i'us khyi'u

³⁵ 一切法総相縁智は長尾 [1987] p.211 によると MS.III.12 で無分別智として示される総括的に見る智のこととされる。また、当該の藏・漢の無性訳よりも、無分別智の一種と考えられる。

³⁶ 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c18-19]

對治差別者、謂一切法總相縁智。以楔出楔道理、遣阿頼耶識中、一切障龜重故。

³⁷ mos: P, N. bas

対治差別というのは、〔菩薩は〕あらゆる障礙の対治として〔三昧に〕住するからであり、亀大な楔が微細〔な楔〕によって除去されるように、アーラヤ識に住する雑染の熏習種子という亀大が微細な対治によって除去されるという意味である³⁸。

MSU.VII.4 [D: 263a6-b1, P: 319a5-8]

gnyen pos rab tu dbye ba ni chos thams cad 'dres pa la dmigs pa dang ldan pas sgrib pa thams cad kyi
gnyen po'i dngos por gnas pa'o //

de bzhin nyid du chos thams cad 'dres par byed de³⁹ / de las gud na med pa'i phyir ro //

khye'us khye'u dbyung ba'i tshul du zhes bya ba ni khye'u snga ma khye'u phyi mas dbyung ba'i tshul du
zhes bya ba'i tha tshig ste / dper na khye'u phra⁴⁰ mos khye'u sbom po 'byin pa de bzhin du kun gzhi mam
par shes pa la nyon mongs pa dang shes bya'i sgrib pa'i sa bon bag chags kyi bdag nyid rags pa gnas pa
thams cad de bzhin nyid la dmigs pa gnyen po'i shes pa dang ldan pa'i ting nge 'dzin phra mos 'byin to //

対治差別とは、〔菩薩は〕一切法総相縁〔智〕を伴うことであらゆる障礙の対治なるものとして〔三昧に〕住するのである。

真如において一切法は総相（*saṃbhinna）であり、それと不離（*avyatireka）だからである。

楔で楔を出す方法でというのは、前の楔を後の楔で出す方法でという意味であり、例えば微細な楔によって大きな楔が除去されるのと同様に、アーラヤ識に住するあらゆる煩惱と所知との障（*kleśa-jñeyāvaraṇa）の熏習種子の亀大な本体が、真如を所縁〔とする〕対治である智を伴う微細な三昧によって除去されるのである⁴¹。

2.6 VII.5 ④堪能差別

MS.VII.5 [D: 32b2, P: 37b6] cf. 長尾 [1987] pp.211-213

bsam gtan gyi bde ba dag gis gnas gang nas gang du 'dod par skye ba yongs su 'dzin pa'i phyir ro //

〔堪能差別とは、菩薩は〕諸の静慮の樂（*dhyāna-sukha）を伴い〔三昧に〕住して、欲するまま

³⁸ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔世親〕[T: 31. 361c29-362a3]

釋曰。縁總法智對治一切障礙而住。如以細楔除去龜楔、住本識中諸雜染法熏習種子說名爲龜、諸對治道、能除彼故、是微細義。

³⁹ de : om. C.

⁴⁰ phra : P. phrag

⁴¹ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T: 31. 427b11-15]

釋曰。無分別智所縁真如、是一切法共相所顯、故說此智名總相縁。定能發此能對治智、亦名對治。聖道微妙、故如細楔。所治種子其性龜重、故如龜楔。

にどこにでも（*yathā-iṣṭam）生を摂受する（*janma parighṇāti）からである⁴²。

MSBh.VII.5 [D: 173a5-6, P: 210a4-5]

las su rung ba nyid kyis rab tu dbye ba zhes bya ba⁴³ ni las su rung ba bsam gtan gang⁴⁴ la bde bar gnas
nas⁴⁵ gang du sems can gyi don mthong ba der skye bar 'gyur ba ste / der yang bsam gtan nyams par mi 'gyur
ro //

de lta bu ni nyan thos mams la med do //

堪能差別というのは、〔菩薩は〕堪能という静慮において楽に住しながら、衆生への利益を見る
処に生まれるのであり、そこにおいても静慮が損なわれることにならない。

以上のようなことは、諸声聞には無い⁴⁶。

MSU.VII.5 [D: 263b1-2, P: 319a8-b2]

las su rung ba nyid kyis rab tu dbye ba ni bsam gtan gyis de ba dag gis gnas nas bsam gtan las yongs su
ma nyams pa bzhin du ji ltar 'dod pa gang du sems can gyi don mthong ba der skye ste / ting nge 'dzin las su
rung ba'i phyir ro //

'di 'dra ba'i ting nge 'dzin kyī las su rung ba nyid ni nyan thos la sogs pa nyid la med do //

堪能差別とは、〔菩薩は〕諸の静慮の楽を伴い〔三昧に〕に住して、静慮より不退転（*aparīhāṇika）
なのと同じく、欲するままに衆生への利益を見る処に生まれるのであり、三昧が堪能だからであ
る。

このような三昧の堪能は、声聞などには無いのである⁴⁷。

2.7 VII.6 ⑤引発差別

MS.VII.6 [D: 32b2-3, P: 37b6-7] cf. 長尾 [1987] p.213

⁴² 玄奘訳『攝大乘論本』[T:31.146c20-21]

堪能差別者、謂住静慮樂、隨其所欲、即受生故。

⁴³ *zhes bya ba* : om. P., N.

⁴⁴ *gang* : om. P., N.

⁴⁵ *nas* : D., C. *na*

⁴⁶ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔世親〕[T:31.362a6-8]

釋曰。由有堪能、住静慮樂、隨有饒益諸有情處。即往彼生、不退静慮。諸聲聞等無如是事。

⁴⁷ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T:31.427b17-19]

釋曰。由此静慮、其性調順有所堪能、隨欲饒益諸有情處。不退静慮、而往受生。聲聞乘中無如是事、所以殊勝。

'jin rten gyi khams thams cad du thogs pa med pa'i mngon par shes pa mngon par sgrub pa dang /
〔引發差別とは、菩薩は三昧で〕あらゆる世界における無障礙なる神通力を引發する（*abhiññā-abhinirhāra）である⁴⁸。

MSBh.VII.6 [D: 173a6-7, P: 2108a5-6]

mngon par sgrub pas rab tu dbye ba dang zhes bya ba ni 'jig rten gyi khams thams cad du thogs pa med pa ni⁴⁹ mngon par shes pa bsam gtan gyis mngon par sgrub par byed pa'o //

引發差別というのは、あらゆる世界における無障礙なる神通力は静慮によって引發するのである

⁵⁰。

MSU.VII.6 [D: 263b2-3, P: 319b2]

mngon par bsgrub⁵¹ pas rab tu dbye ba ni ting nge 'dzin gyi yon tan gyis 'jig rten gyi khams dpag tu med pa mams su thogs pa med pa'i mngon par shes pa skyed do //

引發差別とは、三昧の徳によって無量の世界において、無障礙なる神通力が生じるのである⁵²。

2.8 VII.7⑥作業差別

MS.VII.7 [D: 32b3-4, P: 37b7-38a2] cf. 長尾 [1987] pp.213-216

g-yo bar byed pa dang / 'bar bar byed pa dang / khyab par byed pa dang / ston pa dang / gzhan gyi dngos por bsgyur ba dang / 'gro ba dang / 'ong ba dang / sdud pa dang / rgyas⁵³ par byed pa dang / gzugs kyi lus thams cad 'jog pa dang / skal ba mnyam pas 'gro ba dang / snang bar byed cing mi snang bar yang byed pa dang / dbang nyid du byed pa dang / gzhan gyi rdzu 'phrul rab tu 'jog⁵⁴ pa dang / spobs pa dang / dran pa dang / bde ba sbyin pa dang / 'od zer gtong ba'i rgyu 'phrul chen po mngon par sgrub pa dang /

⁴⁸ 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c22-23]

引發差別者、謂能引發一切世界無礙神通故。

⁴⁹ 本論の 'jin rten gyi khams thams cad du thogs pa med pa'i mngon par shes pa への註釈とみなし、ni は mngon par shes pa の後に本来あるものとする。

⁵⁰ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔世親〕[T: 31.362a11-12]

釋曰。如是四種略說差別。於『毘奈耶瞿沙經』中廣說、復有百千差別。

⁵¹ bsgrub : C. bsgrebs

⁵² 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T: 31.427b21-22]

釋曰。由此定力、引發種種一切世界無礙神通。

⁵³ rgyas : P., N. rjes

⁵⁴ jog : P., N. joms

[作業差別とは、] 1) 振動 (*kampana)、2) 熾然 (*jvalana)、3) 遍滿 (*sphaṇa)、4) 顯示 (*vidarśana)、5) 轉變 (*anyathābhāva-karāṇa)、6) 往 (*gamana)、7) 来 (*āgamana)、8) 卷 (*saṃkṣepa)、9) 舒 (*prathana)、10) 一切色像皆入身中 (*sarva-rūpa-kāya-praveśana)、11) 所往同類 (*sabhāgatā-upasaṃkrānti)、12) 顯 (*āvirbhāva)、13) 隱 (*tiro-bhāva)、14) 所作自在 (*vaśitva-karāṇa)、15) 伏他神通 (*para-rddhy-abhibhavana)、16, 17, 18) 施・念・樂 (*pratibhā-dāna, *smṛti-dāna, *sukha-dāna)、19) 放大光明 (*rāśmi-pramokṣaṇa) という大威神力を「菩薩が三昧で」引發することである⁵⁵。

MSBh.VII.7 [D: 173a7-b6, P: 210a6-b7]

las kyis rab tu dbye ba zhes bya ba la / g-yo bar byed pa ni 'jig rten gyi kham mams g-yo bar byed pa'o //

'bar bar byed pa ni de dag nyid 'bar bar byed pa'o //

khyab par byed pa ni 'od kyis khyab par byed par blta bar bya'o //

ston pa ni gang gzhan gyis mi nus pa de'i 'od kyis⁵⁶ gzhan 'jig rten gyi kham du ma'i sangs rgyas la sogs pa mthong bar byed pa'o //

gzhan gyi dngos por bsgyur ba ni sa la sogs pa mams chu nyid la sogs par bsgyur bar blta bar bya'o //

'gro ba ni skad cig gcig la 'jig rten gyi kham du mar 'gro ba'o //

'ong ba nyid ni de dag nyid nas so //

sdud pa ni rdul phra rab gcig gi nang du 'jig rten gyi kham du ma chud par byas na yang de la 'phel ba med pa'o //

rgyas par byed pa ni rdul phra rab gcig gis 'jig rten gyi kham tshad med pa mams 'gengs par byed pa'o //

gzugs thams cad lus⁵⁷ su 'jug pa zhes bya ba ni ji ltar lus la bya ba mam pa sna tshogs su⁵⁸ du ma thams cad ston pa'o //

skal pa mnyam pas 'gro ba ni ji ltar gdul bya'i don du sum cu rtsa gsum pa mams la kha dog dang dbyibs dag de dang mthun pas mnyam par 'gro ba ste / de bzhin du thams cad du sbyar ro //

snang bar byed pa ni rab tu gsal bar byed pa'o //

mi snang bar byed pa ni rab tu mi snang ba'o //

dbang nyid du byed pa ni ji ltar bdud sangs rgyas nyid du byed pa lta bu'o //

gzhan gyi rdzu 'phrul rab tu 'joms pa ni gzhan gyi rdzu 'phrul zil gyis gnong par byed pa'o //

⁵⁵ 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c23-26]

作業差別者、謂能振動、熾然、遍滿、顯示、轉變、往・来、卷・舒、一切色像皆入身中、所往同類、或顯、或隱、所作自在、伏他神通、施・念・樂、放大光明。引發如是大神通故。

⁵⁶ kyis : P., N. kyi

⁵⁷ lus : P., N. las

⁵⁸ su : om. P., N.

spobs pa sbyin pa ni 'dri ba nyid la'o //

dran pa sbyin pa dang / bde ba sbyin pa ni nyan pas⁵⁹ ting nge 'dzin sbyin pa'o //

'od zer gtong ba'i rdzu 'phrul chen po ni 'jig rten gyi kham s gzhan nas byang chub sems dpa' mams sdud pa'o //

rdzu 'phrul chen po mngon par sgrub pa ni chen por gyur pa'i rdzu 'phrul te / bstan ma thag pa de dag nyid yin te de dag ni nyan thos mams la med do //

作業差別ということについて、1) 振動 (*kampana) とは、諸世界が振動することである。

2) 熾然 (*jvalana) とは、まさにそれら (諸世界) が熾然することである。

3) 遍満 (*spharāṇa) とは、光によって遍満することと見るべきである。

4) 顕示 (*vidarśana) とは、他の者によっては不可能である光によって⁶⁰、他の者に無数の世界の仏などを見させることである。

5) 転変 (*anyathābhāva-karaṇa) とは、地などをまさに水などに変化させることと見るべきである。

6) 往 (*gamana) とは、一刹那に無数の世界へ行くことである。

7) 来 (*āgamana) とは、まさに [一刹那に] それら (無数の世界) より [来ること] である。

8) 巻 (*saṃkṣepa) とは、一極微の内に無数の世界を入れても、そこ (極微) で増大しないことである。

9) 舒 (*prathana) とは、一極微によって無量の世界を満たすことである。

10) 一切色像皆入身中 (*sarva-rūpa-kāya-praveśana) というのは、身において種々の無数のあらゆる事業 (bya ba *kriyā, kṛtya) を示すことである。

11) 所往同類 (*sabhāgatā-upasaṃkrānti) とは、教化すべき [者たち] のために三十三天に顕と形とがその者と相似することで等しく行くことであり、同様に [天界以外の] すべてにおいて適用すべきである。

12) 顕 (*āvīrbhāva) とは、顕わにすることである。

13) 隠 (*tiro-bhāva) とは、明確に現れないことである。

14) 所作自在 (*vaśitva-karaṇa) とは、魔王 (*māra) をまさに仏にするようなことである。

15) 伏他神通 (*para-rddhy-abhibhavana) とは、他の神通を調伏 (*pararaddhy-abhibhavana) することである。

16) 施弁 (*pratibhā-dāna) とは、まさに請問者に対してである。

17) 施念 (*smṛti-dāna)、18) 施樂 (*sukha-dāna) とは、聴聞者に対して三昧を施与することである。

⁵⁹ pas : P., N. pa la

⁶⁰ 玄奘訳の理解に合わせると「他の者に出来ないことがらについて、光によって」とも解せる。

19) 放大光明 (*raśmi-pramokṣaṇa) という大威神力とは、他世界より諸菩薩を集めることである。大威神力を〔菩薩が三昧で〕引發することとは、偉大なる神通であり、まさに直前で述べたそれらであり、それらは諸声聞には無い⁶¹。

MSU.VII.7 [D: 263b3-264a1, P: 319b2-8]

de la **g-yo ba** la sogs pa'i mam par 'phrul pa 'byung ste / 'jig rten gyi khamts tshad med pa **g-yo bar byed pa** ni
ting nge 'dzin gyi mthus 'gul bar byed pa ste / **'bar bar byed pa dang khyab par byed pa** yang de bzhin no //
'jig rten gyi khamts mthong bar mi nus pa mtha' yas pa gzhan dag gam sangs rgyas la sogs pa yang **ston to** //
sa la sogs pa yang chu la sogs pa'i dngos por **gzhan du sgur** ro //
skad cig gis 'jig rten gyi khamts du mar **'gro'o** // **'ong ngo** //
rdul phra rab gcig gi⁶² nang du 'jig rten gyi khamts mang po **sdud** kyang cher mi skye bar byed do //
'jig rten gyi khamts mtha' yas pa mams su rdul gcig gis **rgyas par byed de** / khyab par byed do //
rang gi lus su **gzugs kyi lus thams cad 'jug go** //
gdul pa'i phyir gang gi **gzugs gang yin** pa de'i gan du **gzugs de nyid kyi** **'gro'o** //
snang bar byed pa ni mngon par byed pa'o //
mi snang bar byed pa ni mi mngon par byed pa'o //
dbang nyid du byed pa ni bdud sangs rgyas nyid du **sgur ba'o** //
gzhan gyi rdzu 'phrul rab tu 'joms pa ni gzhan gyi rdzu 'phrul⁶³ zil gyis gnon pa'o //
spobs pa med pa mams la **spobs pa sbyin par byed do** //

⁶¹ 玄奘訳『撰大乘論釋』〔世親〕[T: 31. 362a17-b7]

釋曰。作業差別、謂發神通所作事業。
此中能動一切世界故名振動、即彼熾然故名熾然。
言遍滿者、應知即是光明普照。
言顯示者、由此威力、令無所能餘有情類、欽然能見無量世界、及見其餘佛菩薩等。
言轉變者、應知轉變一切地等令成水等。
言往來者、謂一刹那普能往還無量世界。
言卷舒者、謂卷十方無量世界入一極微、極微不增。舒一極微包于十方無量世界、世界不減。
一切色像皆入身中者、謂身中現無量種種一切事業。
所往同類者、謂如往詣三十三天、色像言音與彼同類。爲化彼故往一切處亦復如是。
顯謂顯現、隱謂隱藏。
所作自在者、如變魔王作佛身等。
伏地神通者、謂能映蔽一切神通。
於請問者施以辯才故、名施辯。
於聽聞者施念、施樂、令得定故名施念樂。
放大光明者、爲欲召集遠住他方世界菩薩。
引發如是大神通者、引前所說大神通故。如是一切聲聞所無、是故殊勝。

⁶² gi : N. gis ni

⁶³ add. P., N. rab

brjed ngas pa mams la **dran pa sbyin par byed do** //

gang dag gis byang chub sems dpa' mams la⁶⁴ 'gug par 'gyur ba pho nya lta bu'i 'od zer gtong ste / gang dag nyan thos la sogs pa la med pa'i rdzu 'phrul chen po 'di dag mngon par 'du byed do //

それ〔作業差別〕について、振動 (*vikurvita) などの威神力が生じて、無量の世界が 1) 振動することは三昧の力によって動かすことであり、2) 熾然 (*jvalana) と 3) 遍満 (*spharāṇa) も同様である。

他の不可見の無量の世界或いは仏なども 4) 顕示 (*vidarśana) するのである。

地などをも水などなるものに 5) 転変 (*anyathābhāva-karāṇa) するのである。

一刹那に無数の世界へ 6) 行く (*gamana) のである。〔一刹那に無数の世界より〕7) 来る (*āgamana) のである。

一極微の内に多くの世界を 8) 巻いて (*saṃkṣepa) も増長しないのである。

あらゆる世界を一〔極〕微によって 9) 舒ばして (*prathana)、遍満するのである。

自らの身体に 10) 一切色が入る (*sarva-rūpa-praveśana) のである

教化のために 11) いかなる処のいかなる色であつてもその処へ色を伴って行く (*gamana) のである。

12) 顕 (*āvirbhāva) とは、顕わにすることである。

13) 隠 (*tiro-bhāva) とは、顕わにしないことである。

14) 所作自在 (*vaśitva-karāṇa) とは、魔王 (*māra) が仏に変化することである。

15) 伏他神通 (*para-rddhy-abhibhavana) とは、他の神通を調伏 (*prārdhy-abhibhavana) することである。

弁才の無い (*apratibhāna) の者たちに、16) 施弁 (*pratibhā-dāna) するのである。

忘れやすい (*smuṣita-smṛti) 者たちに、17) 施念 (*smṛti-dāna) するのである。

諸菩薩を招集する使者 (*dūta) のように 19) 放大光明 (*raśmi-pramokṣaṇa) し、声聞などには無いこれら大威神力を形成 (*abhisamkāra) するのである⁶⁵。

2.9 VII.8 十種難行

⁶⁴ la: om. P., N.

⁶⁵ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T: 31. 427b26-c3]

釋曰。由此定力、引發種種神通所作。顯謂顯現、隱謂隱藏。

所作自在、謂變魔王作佛身等。

伏他神通、謂能映奪他神通力。無辯才者施以辯才。無念樂者施以念樂。

爲召他方遠住菩薩放大光明。引發如是大神通者、引前所說種種神通。如是等類聲聞等無、是故殊勝。

MS.VII.8 [D: 32b4-33a3, P: 38a2-b1] cf. 長尾 [1987] pp.216-220

dka' ba spyod pa thams cad bsdus pa dka' ba spyod pa mam pa bcu mngon par sgrub⁶⁶ pa'i phyir ro //
 dka' ba spyod pa mam pa bcu ni 'di lta ste / khas blang bar dka' ba spyod pa ni / byang chub chen por smon lam
 'debs pa khas len pa'i phyir ro //
 mi ldog par dka' ba spyod pa ni 'khor ba'i sdug bsngal mams kyis mi bzlog⁶⁷ pa'i phyir ro //
 phyir mi phyogs par dka' ba spyod pa ni / sems can thams cad kyi log par sgrub pa mams kyis de las phyir mi
 phyogs pa'i phyir ro //
 mngon du phyogs par dka' ba spyod pa ni / gnod par byed pa'i sems can mams kyi⁶⁸ don thams cad bya ba la
 mngon du phyogs pa'i phyir ro //
 mi gos par dka' ba spyod pa ni / 'jig rten du skyes kyang 'jig rten pa'i chos kyis mi gos pa'i phyir ro //
 mos par dka' ba spyod pa ni / rtog⁶⁹ pa med par yang theg pa chen po la rgya che ba nyid dang / zab pa nyid
 thams cad la mos pa'i phyir ro //
 rtogs par dka' ba⁷⁰ spyod pa ni / gang zag dang chos la bdag med pa rtogs pa'i phyir ro //
 khong du chud par dka' ba spyod pa ni / de bzhin gshegs pa mams kyi⁷¹ dgongs te gsungs pa zab mo khong du
 chud pa'i phyir ro //
 mi 'byed pa kun nas nyon mongs pa med par dka' ba spyod pa ni / 'khor ba yongs su mi gtong yang / des kun nas
 nyon mongs pa med pa'i phyir ro //
 sbyor bar dka' ba spyod pa ni / sgrub pa thams cad las mam par grol ba la bzhugs pa'i sangs rgyas mams 'khor
 ba'i mtha'i bar du lhun gyis grub par sems can thams cad kyi don thams cad mdzad pa dag la sbyor ba'i phyir ro
 //

〔菩薩の三昧は〕また、あらゆる難行を摂する十種難行（*daśavidha-duṣkara-caryā）を引發するから〔声聞よりも殊勝なの〕である。

十種難行は以下のようなものである。

- 1) 自誓難行（*pratijñā-duṣkara-caryā）は、大菩提を得ようと願うこと（*mahābodhi-praṇidadhāti）を自受する（*abhyupagama）からである。
- 2) 不退難行（*avyāvṛtti-duṣkara-caryā）は、諸々の輪廻の苦によって退轉することがない（*nivārita）からである。
- 3) 不背難行（*a-parāṇmu-khībhāva-duṣkara-caryā）は、あらゆる衆生の諸の邪行（*mithyā-pratipatti）

⁶⁶ sgrub : N. bsgrub

⁶⁷ bzlog : P., N. zlog

⁶⁸ kyi : om. P., N.

⁶⁹ rtog : MSU. rtogs

⁷⁰ ba : P., N. ba'i

⁷¹ kyi : D., C. kyis

によっても彼ら（衆生）に背を向けないからである。

4) 現前難行（*abhimukhī-bhāva-duṣkara-caryā）は、害をなす諸衆生へのあらゆる利益をなすことを現前するからである。

5) 不染難行（*nirlepa-duṣkara-caryā）は、世間に生まれても世間の法に染まらないからである。

6) 勝解難行（*adhimukti-duṣkara-caryā）は、〔まだ真理を〕理解していなくても、大乘におけるあらゆる広大と甚深を勝解するからである。

7) 通達難行（*prativedha-duṣkara-caryā）は、人法無我を通達するからである。

8) 随覺難行（*anupraveśa-duṣkara-caryā）は、密意ある教説（*saṃdhāya-vacana）を随覺するからである。

9) 不離不染難行（*adhinna-niḥsaṃkleśa-duṣkara-caryā）は、輪廻を捨てないが、それ（輪廻）に染まらないからである。

10) 加行難行（*prayoga-duṣkara-caryā）は、あらゆる障礙からの解脫に安住する諸仏が輪廻の果てに至るまで無功用（*anābhoga）にあらゆる衆生へのあらゆる利益をなさることを加行するからである⁷²。

MSBh.VII.8 [D: 173b6-7, P: 210b7-211a1]

byang chub sems dpa' ni dka' ba spyod pa yin no zhes gsungs pa'i dka' ba spyod pa gang yin zhe na / dka' ba spyod pa mam pa bcu po de dag thams cad kyis bstan pa yin no //

de la mi 'byed par kun nas nyon mongs pa med par dka' ba spyod pa⁷³ zhes bya ba ni mi 'byed pa ni 'dir ma thar pa'o // 'di la bu ni thar pa yin te / gang 'khor ba las kyang ma grol la / de nyid du kun nas nyon mongs pa yang ma yin pa'o //

lhag ma dka' ba spyod pa dgu ni don go sla'o //

⁷² 玄奘訳『攝大乘論本』[T: 31.146c26-147a10]

又能引發攝諸難行。十難行故。

十難行者、一自誓難行、誓受無上菩提願故。

二不退難行、生死衆苦不能退故。

三不背難行、一切有情難行邪行、而不棄故。

四現前難行、怨有所、現作一切饒益事故。

五不染難行、生在世間、不爲世法所染汚故。

六勝解難行、於大乘中、雖未能了、然於一切廣大甚深、生信解故。

七通達難行、具能通達補特伽羅法無我故。

八隨覺難行、於諸如來所說甚深祕密言詞、能隨覺故。

九不離不染難行、不捨生死而不染故。

十加行難行、能修諸佛安住解脫一切障礙、窮生死際、不作功用、常起一切有情一切義利行故。

⁷³ add. P., N. ni

ste / de gnyis mi 'byed pa'i phyir ro //

sbyor bar dka' ba ni nyon mongs pa dang shes bya'i sgrub pa thams cad las rnam par grol ba spangs pa la
zhugs pa'i de bzhin gshegs pa mams sems can gyi don mdzad pa'i khyad par ro //

「難行〔をなす〕菩薩とは」と説かれるのは⁷⁸、それらの十種難行を示すのである。

- 1) 自誓難行(**pratijñā-duṣkara-caryā*)は、大菩提を得ようと願うこと(**mahābodhi-praṇidadhātī*)を自受する(**abhyupagama*)からであり、難とは自樂(**ātma-sukha*)を顧みず、他者への利益を誓う(**pratijñā*)からである。
- 2) 不退難行(**avyāvṛtti-duṣkara-caryā*)は、諸々の輪廻の苦である寒さや風によって退転することがない(**nivārita*)からである。
- 3) 不背(**a-parāṇmu-khībhāva*)とは、諸々の邪行(**mithyā-pratipatti*)を有する衆生への利益をなす難より背を向けないからであり、或る者たちが母などに対する邪行と、愛情のために不必要であるが眼をえぐり与え(**saṃādāpya, vyuthāpya*)、両足で踏み彼への利益をなす難である⁷⁹。
- 4) 現前難行(**abhimukhī-bhāva-duṣkara-caryā*)は、害をなす諸衆生へ利益をなす難である。
- 5) 世間に生まれても利得など八つの世間の法に染まらないことが難である。
- 6) 「まだ真理を」理解していなくても、大乘の意味は微細で殊勝なる力を持つことで勝解し信受する難である。
- 7) 通達(**pravedha*)とは、現観(**abhisamaya*)であり、正知(**samadhigama*)と同じ意味である。人法が無い自性とは妄分別を否定するという仕方です難である。
- 8) 随覚(**anupraveśa*)とは、密意ある教説(**saṃdhāya-vacana*)〔を随覚すること〕である。難とは、聞いた意味を廃して、聞かなかった意味を理解するからである。
- 9) 輪廻を捨てずに、それ(輪廻)の過失によっても染まることがないのが難であり、その二つ(輪廻と解脱)を離れないからである。
- 10) 加行の難(**prayoga-duṣkara*)とは、煩惱〔障〕と所知〔障〕とのあらゆる障(**kleśa-jñeyāvaraṇa*)からの解脱、つまり断に安住する諸如来が衆生への利益をなされる殊勝である⁸⁰。

⁷⁸ 玄奘訳では当該の導入の引用部分が世親訳と同じであるため、蔵訳者の翻訳の違いであり趣旨は同じと見る。

⁷⁹ 一応の訳を施したが、意味を成しえないものとなった。なお、長尾〔1987〕pp.219-220 では漢訳諸本を対照し、「邪しな振舞」とは、例えば用もないのに戯けに眼球を所望し、それを両足で踏みこじるなどの非道な振舞のこと」と注記され、そのモチーフがジャータカにある可能性の指摘がされている。

⁸⁰ 玄奘訳『攝大乘論釋』〔無性〕[T: 31. 427c16-428a7]

釋曰。如說菩薩修諸難行。一切難行十種所顯。

自誓難行、誓受無上菩提願者、不顧自樂。誓受饒益一切有情。甚爲難故。

不退難行、生死衆苦不能退者、久處生死。風寒等苦所不能退。甚爲難故。

不背難行、一切有情雖行邪行、而不棄者、於父母等行邪惡行。或無所用戲求眼睛。雙足踐踐。不觀其過而作饒益。甚爲難故。

つづく

3. 拙稿 [2020] への翻訳訂正

拙稿 [2020] にて MS.VI 「増上戒品」及び世親釈・無性釈のテキスト及び和訳を提示したが、2020 年度の日本印度学仏教学会第 71 回学術大会での研究発表に際し、訳語の再検討を行ったところ、「3.6 VI.5④甚深殊勝」p.118-124(39-45)にて訂正すべき箇所が数箇所見つかったため、ここに慚愧し訂正案を提示する。

MS.VI.5

p.124(39). 11.17-19

そのうち、④甚深殊勝とは、菩薩は次のような種類の善巧方便 (*upāya-kausalya) によって、殺生等の十種の業を行っても、それによって有罪 (*avadya) ともならず、無量の福德をも生じて、無上正等覚をも速やかに現等覚するのである。

p.123(40). 11.4-5

また、化作 (*nimitta) の身と語との業もまた、菩薩の甚深なる戒として知るべきであり、それにより王権を振るい (*rājyaṃ kṛtvā)、種々に諸衆生を苦しめることを示現して、衆生を律 (*vinaya : 正しい行い) に据え付けるのである。

p.123(40). 11.9-11

種々の本生譚 (*jātaka) を教示することによって、他の衆生を害することで、それ以外の衆生を利益することを顕示するので、[話を聞いた] 他の者たちは清浄心を先とする成熟をも達成する。以上が菩薩の戒の④甚深殊勝である。

MSBh.VI.5

p.122(41). 11.4-16

〈第六卷〉

④甚深殊勝とは、菩薩は次のような種類の善巧方便によってということについて、菩

現前難行、怨有情所、現作一切麁益事者、雖有重怨而現饒益。甚爲難故。
不染難行、生在世間、不爲世法所染汚者、常處世間利等八法所不能染。甚爲難故。
勝解難行等者、於微妙義殊勝神力。雖未能了而深信解。甚爲難故。
通達難行等者、通達現觀等覺一義能具通達。遍計所執補特伽羅一切法性皆無所有。甚爲難故。
隨覺難行等者、於佛所說秘密言詞。捨隨聞義。覺不開義。甚爲難故。
不離不染難行等者、不捨生死不染彼過。甚爲難故。
加行難行等者、已斷已脫一切煩惱及所知障。而恒現前起作一切利有情事。盡未來際常無休息。欣修此行甚爲難故。

薩が様々な (*yathātathā) 種類の善巧方便の能力を有するようになることを教示するのである。

まずもし、〔菩薩は〕このように知る。「この人はここ（現世）で不善なる無間〔業〕などをなすであろう」と、他心を知るならば。またもし、〔菩薩は〕それ以外の他の方便がないならば、「この者（悪人）がこのように殺されるならば、確実に善趣に向かうこと (*sugati-gamana, bde'gror'gro ba) になり、〔悪人が〕この（殺生の）業をなすならば、確実に悪趣に墮すこと (*durgati-gamana, ngan'gror'gro ba) になろう」と明確に知って、次のように理解するならば。〔菩薩は〕このような心を生じるべきであり、「私（菩薩）がこの（殺生の）業をなすことで、私は悪趣に行くとしても、そのことを望むが、この者（悪人）が現在に僅かな苦を受けることで、未来の安樂を得ることになる」とその者（菩薩）はこのように医者と類似した心を生じて、殺すことになっても非福がなく、福德こそが増大するであろう。福德こそが増大するそのことにより速やかに無上正等覺を獲得することになり、このようなことが〔菩薩の戒の〕極めて甚深である。

p.122(41). 註 96. ll.11-19 BBh.I.10

ある性罪についても、菩薩が次のような善巧方便によって行なうならば、それによって有犯にならず、多くの福德が生じるのである。

例えば、多くの何百もの生き物、大徳のあるもの、諸の声聞・独覺・菩薩を何らかの財物のために殺そうとして、多くの無間業の行いに努めた強盗と泥棒を、菩薩は見る。

そして、〔菩薩は強盗と泥棒を〕見て、さらにこのように考えて心を決める。「例え、私がこの生き物の命を奪うことで諸地獄に生まれようとも、私が地獄に生まれることは構わない。だが、この衆生が無間業をなして、地獄に落ちることはあつてはならない」と。このような意樂を持ち、善の心あるいは無記の心を持つ菩薩はその生き物を知って、慚愧しつつ、当来〔世〕の〔この生き物に対する〕正に憐愍の心により〔その生き物の〕命を奪う場合、有犯にならず、むしろ多くの福德が生じるのである。

p.121(42). ll.5-9

また、化作の身と語との業もまた、菩薩の甚深である戒として知るべきであり、それにより王権を振るい、種々に諸衆生を苦しめることを示現して、衆生を律 (*vinaya : 正しい行い) に据え付けるのであるということについて、化作とは何であれ化作の自性を持つものであり、すなわち、それもまたアナラ王 (*Anala-rāja, rgyal po me) が善財 (*Sudhanakumāra, gzhon nu nor) 〔童子〕に居城で教示したことと同様に適用すべきである。

p.121(42). l.14-p.120(43). l.1

種々の本生譚 (*jātaka) を教示することによってというのは、「ヴィシュヴァンタラ本生譚」

(*ViśvantaraJātaka)に出ている通りであり、そこでは、菩薩はバラモンに息子〔と娘〕を布施として喜捨したそのことが化作であって、〔実際には〕他の衆生を害することで、他の衆生を利益することがないのである。そのように菩薩が他者を害して、他の衆生を利益することとは甚深なのである。

MSU.VI.5

p.120(43). ll.14-22

④甚深殊勝について、菩薩は次のような善巧方便によって云々と言うのである。

殺生などの業はどの状態で〔菩薩が〕行うのかというならば、もし、他のその者(悪人)が不善の業を始めるなら、〔菩薩は〕目の当たりに知って、彼(悪人)の心も知ることになる。そして、彼(悪人)は他の方法によっても排除できず、悪趣に行くことにもなり、彼(悪人)が殺されるならば、善趣に生まれることも理解して、「私(菩薩)はこの業によって悪趣に行くことは構わないことであるが、この者たち(悪人)が大きな苦蘊を伴うことになるならば、そうであってはならない」と考える殊勝なる意樂を得るので、〔悪人を〕見捨てないで、医者のように利益を望むので、殺生の業をなすならば、有罪はなくなる。

無量の福德をも生じて、無上正等覺をも速やかに現等覺するのであり、それ以外ではないのである。

甚深とは、理解し難いからである。

p.119(44). ll.6-10

さらに、身と語との業が〔甚深で〕理解し難いとは、それにより王権を振るい云々という。例えばアナラ王(*Anala-rāja, rgyal po me)の行いで死刑執行人(*vadyagātaka, gshed ma)と処刑者(*vadyapuruṣa, gnod pa)と死刑命令者(gsoḍ par bsgo pa)という様々な分別〔が化作〕であるように、聖者文殊などの諸菩薩の殺生が化作であるのと同様である。

さもなければ、衆生を悪業より退けることができないのである。衆生を教化するためにそれら衆生を種々に悩ますことも化作するのである。

p.119(44). l.22- p.118(45). l.7

種々の本生譚(*jātaka)を教示することによってというのは、化作の身と語との業を理解し難いから甚深という文脈である。例えば、「ヴィシュヴァンタラ」などの本生譚に、バラモンに二人の子などを布施する化作のようにである。

なぜかといえば、菩薩は〔実際に〕他の衆生を害することで、他の衆生を利益することをなさらないからである。

もしそうであるならば、化作の布施などによって諸の波羅蜜をどうして完成することにな

るのかと言うならば、受領者において化作であろうと化作でなかろうと、利益は等しいからである。

それでは、どうなのかと言うならば、布施などに対して衆生は清浄心を先とする成熟〔をも達成する〕からである。

例え、受領者も化作であっても、そのようであるなら過失はなく、このような〔化作の〕布施によって諸の波羅蜜が達成することはないのである。

略号・参考文献一覧

略号

- BBh : *Bodhisattvabhūmi* (Maitreya?). see W, Du, D: No.4037, P: No.5538.
- C : Cone edition.
- Chi. : Chinese 漢訳.
- D : Derge edition.
- Du : Nalinaksha Dutt, *Bodhisattvabhūmi (being the XVth section of Asaṅgapada's Yogācārabhūmi)*, K. P. jayaswal Research Institute, Patna, 1966.
- L : Lévi Sylvain, *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra, tome I*, Paris, Librairie Ancienne Honoré Champion, 1907 (repr. Kyoto, Rinsen, 1983).
- La : Lamotte Étienne, *La somme du grand véhicule d'asaṅga (Mahāyānasamgraha) Tome I, II*, Louvain, 1938 (repr. Université de Louvain Institut Orientaliste Louvain-La-Neuve, 1973).
- MAV : *Madhyāntavibhāṅgabhāṣya* (Vasubandhu) ed. by G. Nagao, *Madhyāntavibhāṅga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, Tokyo, 1964, D: No.4027, P: No.5528.
- MSA : *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (Maitreya?). See MSABh, D: No.4020, P: No.5521.
- MSABh : *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (Vasubandhu). see L, D: No.4026, P: No.5527.
- MS : **Mahāyānasamgraha, Theg pa chen po bsdus pa* (Asaṅga). D: No.4048, P: No.5549, cf. 長尾 [1982] [1987] .
- MSBh : **Mahāyānasamgrahabhāṣya, Theg pa chen po bsdus pa'i 'grel pa* (Vasubandhu). D: No.4050, P: No.5551.
- MSU : **Mahāyānasamgrahopanibandhana, Theg pa chen po bsdus pa'i bshad sbyar* (Asvabhāva). D: No.4051, P: No.5552.
- N : Narthang edition.
- P : Peking edition.
- Skt. : Sanskrit. 梵本.
- T : 大正新脩大藏經.
- Tib. : Tibetan 藏訳.
- W : Unrai Wogihara, *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)* (『梵文菩薩地經』), Seigo Kenkyukai, 1936 (repr. Tokyo, Sankibo Buddhist Book Store, 1971).

参考文献

Karl Brunnholzl

- [2019] *A Compendium of the Mahayana: Asanga's Mahayanasamgraha and Its Indian and Tibetan Commentaries*, Hamburg.

Lamotte, Étienne

- [1938] *La somme du grand véhicule d'asanga (Mahāyānasamgraha) Tome I, II*, Louvain (repr. Université de Louvain Institut Orientaliste Louvain-La-Neuve, 1973).

Lévi, Sylvain

- [1907] *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra, tome I*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).
- [1911] *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra, tome II*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).

Paul J. Griffiths, Noriaki Hakamaya, John P. Keenan and Paul L. Swanson (Oxford)

- [1989] *The Realm of Awakening: A Translation and Study of the Tenth Chapter of Asanga's Mahāyānasamgraha*, Oxford University Press, New York.

岩田諦静

- [1981] 『初期唯識思想研究—世親造『摂大乘論釈』所知相章の漢藏対照—』大蔵出版.
- [1992] 「世親造『摂大乘論釈』所知依章の漢藏対照 (一)」『法華文化研究』第 18 号、立正大学法華經文化研究所.
- [2000] 「世親造『摂大乘論釈』所知依章の漢藏対照 (二)」『身岩山大学仏教学部紀要』創刊号.
- [2001] 「世親造『摂大乘論釈』所知依章の漢藏対照 (三)」『身岩山大学仏教学部紀要』1 号.
- [2003] 「世親造『摂大乘論釈』所知依章の漢藏対照 (四)」『身岩山大学仏教学部紀要』4 号.

宇井伯寿

- [1935] 『摂大乘論研究』岩波書店.

上野隆平

- [2015] 『『大乘莊嚴經論』の仏陀観 : Pratiṣṭhādhikāra (基盤の章) の研究』龍谷大学博士論文.

衛藤即応

- [1935] 『〔玄奘訳〕摂大乘論釈』国訳一切經・瑜伽部八、大東出版社.
- [1935] 『〔真谛訳〕摂大乘論釈』国訳一切經・瑜伽部九、大東出版社.

合田秀行

- [1993] 「翻訳『摂大乘論』第三章の解明 (1) —チベット訳無性註を中心として—」『東方』9.
- [2006] 「翻訳『摂大乘論』第三章の解明 (2) —チベット訳無性註を中心として—」『精神科学』44.

片野道雄

- [1975]『インド仏教における唯識思想の研究—無性造「摂大乘論」所知相章の解説—』文栄堂書店。
[1976]「無住涅槃としての転依—無性造「摂大乘論注」第九章の解説—」『大谷学報』56-2。
[1978]『摂大乘論』序章の解説『仏教学セミナー』27、大谷大学仏教学会。

崔鍾男

- [2005]「戒・定・慧 三学の修行方法」『印仏研』107。

佐々木月樵

- [1931]『漢譯四本對照四譯對照攝大乘論』臨川書店。

嶋本弘徳

- [2019]「瑜伽行派における buddhatva 理解と一乗の問題：『摂大乘論』及び周辺文献を中心に」『佛教学研究』75。
[2020]『摂大乘論』第 VI 章「増上戒品」への註釈文献の翻訳研究『龍谷大学佛教学研究室年報』24。

下川邊季由 (Shimokawabe, Yshiki)

- [1992] *An Emendation of the Tibetan Translation of Vasubandhu's Commentary on Jñeyalakṣaṇa-praveśa of the Mahāyāna-Saṃgraha* 『法華文化研究』18。
[1994]「チベット語訳世親釈「摂大乘論・入所知相分」和訳」『法華文化研究』20

勝呂信静・下川邊季由

- [2007]『新国訳大蔵經（瑜伽・唯識部 11）摂大乘論』大蔵出版。

高崎直道

- [1982]「瑜伽行派の形成」『講座・大乘仏教 8 唯識思想』春秋社。

武内紹晃

- [1979]『瑜伽行唯識学の研究』百華苑。

長尾雅人 (Nagao, Gajin)

- [1982]『摂大乘論 和訳と注解（上）』講談社。
[1987]『摂大乘論 和訳と注解（下）』講談社。
[2007a]『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート（1）—』長尾文庫。
[2007b]『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート（2）—』長尾文庫。
[2009]『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート（3）—』長尾文庫。
[2011]『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート（4）—』長尾文庫。

袴谷憲昭 (Hakamaya, Noriaki)

[1973] *Mahayanasamgrahopanibandhana (1) : Its Tibetan and Chinese Texts* 『駒澤大学仏教学部研究紀要』 31.

[1974] *Mahayanasamgrahopanibandhana (2) : Its Tibetan and Chinese Texts* 『駒澤大学仏教学部研究紀要』 32.

[1975] *Mahayanasamgrahopanibandhana (3) : Its Tibetan and Chinese Texts* 『駒澤大学仏教学部研究紀要』 33.

原田和宗

[1997] 「蛇・縄・色等」の比喻と入唯識性(II)—MSU III §§8~9 の和訳と評註— 『九州龍谷短期大学紀要』 43.

藤田光寛

[1986] 「〈菩薩地戒品〉 所説の菩薩戒の一考察」 『印仏研』 68.

[1989] 「〈菩薩地戒品〉 和訳 (I)」 『高野山大学論叢』 24.

[1990] 「〈菩薩地戒品〉 和訳 (II)」 『高野山大学論叢』 25.

[1991] 「〈菩薩地戒品〉 和訳 (III)」 『高野山大学論叢』 26.

[1995] 「〈菩薩地戒品〉 に説かれる「殺生」について」 『密教文化』 191.

矢板秀臣

[2008] 「菩薩の布施：『菩薩地』 布施品の研究」 『成田山仏教研究所紀要』 31.

[2011] 「菩薩の瞑想：『菩薩地』 静慮品の研究」 『成田山仏教研究所紀要』 34.

[2017] 「饒益有情戒について」 『成田山仏教研究所紀要』 40.

[2018] 「菩薩の饒益活動について」 『成田山仏教研究所紀要』 41.

[2019] 「菩薩の忍：『菩薩地』 忍品の研究」 『成田山仏教研究所紀要』 42.

〈キーワード〉 『摂大乘論』、無著、世親、無性、六種差別、十種難行

(博士後期課程)